

Title	ジョン・オーウェンの説教についての一考察：チャールズ一世処刑翌日になされた説教の分析
Author(s)	佐野, 正子
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume19, 2003.12：213-230
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3308
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ジョン・オーウェンの説教についての一考察

——チャールズ一世処刑翌日になされた説教の分析——

佐野 正子

一 ピューリタン説教の役割と特徴

イングランドの宗教改革、特にピューリタニズムにおいて説教の果たした役割の重要性は、余り日本では認識されていないのではないかと思われる。ピューリタン聖職者らによつてなされた説教は、神の啓示の宣言としてピューリタンらに特に重んじられ、ピューリタンの礼拝の中で中心的な重要な位置が与えられていた。^①ピューリタンの説教がピューリタニズムに大きな影響力を与えたことについては、ウィリアム・ハラールが指摘しているところである。^②ハラールは、ピューリタン運動が進められていく中で、ピューリタニズムには「魂の改革」という特徴が表れてきたこと、そしてその「魂の改革」に対して説教は重要な役割を果たしたことを説いている。

ピューリタン説教の研究史を概観すると、古いところでは J. Brown の *Puritan Preaching in England* (NY, 1900) や C. F. Richardson の *English Preachers and Preaching: 1640-1670* (NY, 1928) と同じ二冊の小書が挙げられるが、簡潔にピューリタン説教の説明がなされているだけである。初めて本格的にピューリタンの説教

が研究として取り上げられたのが、一九六九年に出版されたジョン・ウィルソンの研究 (*Pulpit in Parliament: Puritanism during the English Civil Wars 1640-1648*)⁽³⁾である。その研究書の副題にあるようにウィルソンの研究は、一六四〇年から一六四八年までの長期議会において行われた説教に焦点をしばって研究がなされている。

ピューリタンによる説教の特徴を見てみると、ピューリタン聖職者らが行なっている説教には共通の「形式」が見られることは注目すべきことである。この説教の形式は一般的に「プレイン・スタイル」と呼ばれている。エリザベス朝時代のピューリタンの指導者であるウィリアム・パーキンスが *The Arte of Prophecyng, or, A Treatise concerning the sacred and only true manner and methode of Preaching* において説いた説教の形式が、ピューリタンらに広く用いられるようになったものである⁽⁴⁾。

プレイン・スタイルとはどのような形式なのであろうか。それは、聖書のテキストを幾つかに区切って「教理」(doctrines)を示し、次にその「根拠づけ」(reasons)を行い、最後に「適用」(use)ないし「応用」(application)が示されるというものである。

二 長期議会における説教について

一六四〇年代のピューリタン革命期には、イングランドが議会派と王党派に分かれて内戦が行われ、一六四九年一月には国王処刑という出来事が起こり、共和制へとイングランドの政治体制が大きく変化した時期である。政治的指導者たちは議会でなされる説教を聞き、神学的また政治的ヴィジョンを与えられて革命を推進していったと考えると、その時期に開かれていた長期議会において行われていた説教が議員に与えた影響は大きいと言えるであろう。

う。これら長期議會で行われていた礼拝には、指導的立場にいた聖職者が説教者に選ばれていたが、特にイングランドの国教会を改革するために議會によつて招集されたウェストミンスター神学者會議に出席していた聖職者が頻繁に説教者として選ばれていた。⁽⁵⁾ その中でなされた説教は教週間のうちに印刷され、そのメッセージは議會に参加していた議員を越えてより広く読まれて、ピューリタン革命の推進力となつたと考えられる。

長期議會では、毎月最後の水曜日には議會に隣接する聖マーガレット教会に議員が集まり、「断食日」(Fast-day)として、二人の説教者が招かれて礼拝が大切に守られていた。また「感謝礼拝」(thanksgivings)もしばしば持たれていた。一六四〇年に長期議會が開催された当初は長老派議員が議會において勢力をもつていたため、説教に招かれる説教者も長老派ピューリタンが多かつたが、革命が進む中で議會軍が議會に対して影響力を持つようになり、軍の幹部が独立派ピューリタンを重んじたことに伴つて、独立派ピューリタンらが説教者として招かれるようになっていった。特にプライドのバージ以後、すなわち一九四八年末クロムウエルに命じられたプライド大佐が登院してくる議員のうち、長老派と目される議員一四〇名を追い返しクーデターを起こした。そして軍と独立派議員は六〇名たらずの議員をもつてイングランド下院を構成する旨を決定した。この議會が「ランプ議會」と呼ばれるものである。後にクロムウエル政権の時代になると、独立派ピューリタンたちがクロムウエルの教会政策において中心的な役割を果たすようになる。その独立派のピューリタンの中で最もクロムウエルに重んじられたのがジョン・オーウェン (John Owen, 1616-1683) であつた。⁽⁶⁾ ウィルソンはオーウェンについて以下のように評している。「ジョン・オーウェンは議會の説教壇においてなされた最後の、そしてとても重要な説教者である。…一六四〇年代にウェストミンスター議會に説教者として登場し、一六四六年と一六四八―九年の断食日に下院で説教を行い、その後ランプ會議においても特別な機会に説教をしている。」⁽⁷⁾ このようにウィルソンは、オーウェンが長期議會やランプ會議

において重要な説教者として高く評価されていたことを指摘している。

三 議会でなされたジョン・オーウエンの説教

本稿ではピューリタン説教の特徴と役割を理解するための一考察として、ジョン・オーウエンの一つの説教を取り上げ、その分析を試みたい。オーウエンの説教を分析することによって、革命を推進していったピューリタン指導者自身が、目の前に展開されているピューリタン革命をどう神学的に捉え解釈しているか、また神学的概念によって歴史をどう理解しているかということが説教において示されているのではないかと考えられるからである。すなわちピューリタン革命という同時代史が聖書を用いて解釈されており、オーウエンの説教には彼の歴史神学が表れているのではないかと考えられるからである。

ジョン・オーウエンの生涯を概観すると、オーウエンは一六一六年に生まれ、一六三一年オックスフォード大学クイーンズ・カレッジに入学し、一六三二年にB.A.、一六三五年にM.A.を受ける。しばらくロバート・ドーマーやラヴリース卿の私教師をした後、一六四二年ごろエセックス州フォードムの教区牧師となる。いくつかのパンフレットを表わし始めて、次第にピューリタン神学者としての名声を高めていった。一六四六年四月二十九日に初めて長期議会の下院に招かれて「変わらぬ自由な恩寵のヴィジョン」という題で説教を行い、その後もしばしば下院や軍会議などに説教者として招かれるようになる。一六四九年四月一九日に下院で行なったオーウエンの説教をクロムウェルが聴いたことがきっかけとなって、クロムウェルから重んじられるようになり、アイルランドやスコットランドへの遠征にクロムウェルの従軍牧師として参加した。その後一六五一年三月には、オックスフォード大学ク

ライスト・チャーチというコレッジの学長となり、翌年九月にはクロムウエルのもとにオックスフォード大学の副総長⁽⁸⁾となつて、革命中に大きな打撃を受けたオックスフォード大学の再建に尽くした。また一六五〇年代にはプロテクター（護民官）に就任したクロムウエルに宗教的助言者として重んじられ、クロムウエルの教会体制に大きな影響を与えている。また革命政府の宗教上の代弁者として、さまざまな教義上の論争を行なつた。一六五八年のサヴォイ宗教会議では、トマス・グッドウインらと会議の指導的な役割を果たし、独立派の信仰箇条であるサヴォイ宣言を起草する。クロムウエルの死後、一六六〇年にクライスト・チャーチ・コレッジを退き、故郷スタッダムへ引退し、王政復古後の反動の中で厳しい弾圧にさらされつつ説教を続け、多くの著作を執筆する。復古後も独立派の宗教的代表者として、宗教的寛容を主張しつづけ、弾圧犠牲者への救援などに尽力し、一六八三年八月に六七歳で世を去つた⁽⁹⁾。ジョン・オーウェンは、ピューリタン革命期においてもそして王政復古後においても独立派ピューリタンの指導者としての歩みが続けたピューリタンであつた。

ジョン・オーウェンの説教分析に入る前に、彼の印刷された説教について概観しておきたい。著作集第八巻には、彼の生前に印刷された一六の説教が収められている⁽¹⁰⁾。そのうち一二の説教が一六六〇年以前になされ、その中の九つの説教は議会においてなされたものである。一六四六年の第一次内戦の終結の頃から一六五三年の長期議会解散までには、議会の下院で八回説教をしている。そのうち六つの説教は数週間のうちに印刷され、他の一つは彼の死後一七二二年に印刷され、残りの一つは印刷されなかつた⁽¹¹⁾。前述したピューリタンの説教の特徴である「プレイン・スタイル」の説教形式は、オーウェンのこれらの説教にも見られることは注目すべきことである。オーウェンも、聖書のテキストを幾つかに区切り、聖書の釈義を行ないつつ、要所要所で「考察」(Observation)を行い、説教の最後にその「適用」(Use)を示している。

では王政復古前のオーウェンの説教のうち議会においてなされた説教がどのような状況のもとで語られたものであるのかをまとめておきたい。

第一説教⁽¹²⁾「変わらざる自由な神の恵みのヴィジョン」(A Vision Of Unchangeable, Free Mercy)は、使徒行伝一六章九節をテキストに、一六四六年四月二九日の断食日の説教としてなされた。第一次内戦が議会軍の勝利によつて閉じられようとしている時期であり、オリヴァー・クロムウェルが四月二二日に議会に戻り、二七日にチャールズ国王が変装してロンドンを去りオックスフォードに逃亡したという状況の中で語られたものである。この説教では、すべてのこの世界の出来事は、神の決定的なご計画とみ旨によるものであり、不信仰な人々は神の怒りを招くと警告されている。

第二説教「神の護りによつて勇気づけられた正しき情熱」(Righteous Zeal encouraged by Divine Protection)は、エレミヤ書一五章一九一—二〇節を説教のテキストとしている。この説教は、チャールズ国王処刑翌日の一六四九年一月三一日になされた。預言者エレミヤの時代の南王国ユダと、一七世紀イングランドを重ね合わせて、マナセ王を例に挙げて偶像礼拝や専制政治をする為政者は、神の裁きによつて滅ぼされることを説いている。

第三説教「天と地が震われ移されて」(The Shaking And Translating of Heaven and Earth)と題された説教は、四月一九日にヘブル人への手紙二二章二七節「この『もう一度』という言葉は、震われるものが残るために、震われるものが、造られたものとして取り除かれることを示している。」をテキストとして説教されたものである。当初三月二二日の断食日に説教に招かれたが、断食日自体が四月五日に延期されさらに四月一九日に延期された。この日が定期的になされる最後の断食日となり、それ以後は変則的にもたれることになる⁽¹³⁾。教皇の権力の反キリスト的な独裁は、ヨーロッパ全体の人々の生活や政治や宗教を侵害してきた。反キリスト的要素を取り除くことによつ

て初めて、諸国家はキリストのために真に仕えることができると説いている。クロムウェルがオーウェンと知り合ったきっかけがこの日のオーウェンの説教であった。この日オーウェンの説教を聴いたクロムウェルは感銘を受け、クロムウェル自らオーウェンに近づき、彼のチャプレン（従軍牧師）となることを誘ったというエピソードが残っている。それ以後オーウェンは最も信頼されたクロムウェルの助言者の一人となつていくのである。

第四説教「キリストの国の促進」(*Advantage of the Kingdom of Christ*)は、一六五一年一月二四日になされた説教である。オーウェンは一六五〇年後半からスコットランドへの遠征にチャプレンとしてクロムウェルに伴った。そしてこの日スコットランド軍に対する勝利を感謝するための礼拝に説教者として招かれ、エゼキエル書一七章二四節「野のすべての木は、主なるわたしが高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木を緑にすることを知るようになる。主であるわたしはこれを語り、これをするのである。」をテキストとして説教がなされた。国家的出来事においても神の導きがあり神の祝福があることが讃美されている。

第五説教「キリストの国についてと統治者の権力について」(*Christ's Kingdom and the Magistrate's Power*)と題された説教は、このランブ議会における最後の説教である。ダニエル書七章一五—一六節をテキストに懺悔日である一六五二年一月一三日になされた。オーウェンを中心とした独立派聖職者の指導者達は、後にクロムウェル教会体制の基となることになる『福音の伝道のための謙虚な提案』(*Humble Proposals for the Propagation of the Gospel*)を一六五二年二月に議会に提出し、審査委員制と追放委員制の導入の提案が審議されていた頃の説教である。そしてオーウェンらの提案を受けて、一六五三年二月二五日には、「統治者は、福音のために、宗教的な事柄に関して権力をもつ」ことが決議され、審査委員制設置に向けて本格的な審議が開始された。この説教が当時の議会で審議されていた内容と深く関連していることは注目すべきことである。

第六説教「シオンを築く神のわざと、神の民の務め」(God's Work in Founding Zion, and His People's Duty Thereupon)は、一六五六年九月一七日になされた。クロムウエルは一六五三年四月二〇日にランブ議會を解散していたが、一六五三年一二月にクロムウエルはプロテクター(護民官)に就任し、あらたに各地から適任の候補者を推薦させて軍幹部が検討して議員を指名するという「指名議會」と呼ばれる議會を開くことになった。その開催日の説教者にオーウエンは招かれている。いかにオーウエンがクロムウエル政権において指導的聖職者として重んじられていたかがここからも明らかとなる。

以上のように議會でなされたオーウエンの説教を見ると、説教で語られるメッセージと語られた当時の歴史的状况とが密接に結びついていることが分かる。イングランドの歴史を神の摂理との関係によつて捉え解釈しているのである。

四 チャールズ一世処刑翌日になされたオーウエンの説教

ピューリタン革命の一つのエポックとなったチャールズ一世処刑(一六四九年一月三〇日水曜日)の翌日に、ジョン・コーデル(John Cordell)と共に下院に説教者として招かれたということも、オーウエンが重要な説教者であったことを示しているであろう。国王処刑が月の最後の水曜日であったため、その翌日に「懺悔日」が持たれた。国王処刑という衝撃的な歴史的出来事を踏まえて、どのような説教がなされたのであろうか。

オーウエンの説教は、「神の護りによつて勇氣づけられた正しき情熱」(Righteous Zeal encouraged by Divine Protection)という題でなされ、エレミヤ書一五章一九二〇節「彼らはあなたの所に帰ってくる。しかしあなた

が彼らの所に帰るのではない。わたしはあなたをこの民の前に、堅固な青銅の城壁にする。彼らがあなたを攻めても、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを助け、あなたを救うからであると、主は言われる。」を説教のテキストとしている。チャールズ二世の処刑の翌日にもたれた礼拝の説教であるので、当然前日の出来事が意識されつつ、どのようなことが説教で語られたのか注目されたことであろう。そのため二月二八日付けのオーウェン自身の序文を付けて印刷されている。

この説教も他の説教と同様に、聖書の積義をしながら「考察」(Observation)を重ね、最後に「適用」(use)を行なうというピューリタンの説教の特徴である。「ブレイン・スタイル」が用いられている。オーウェンが、聖書の積義に「考察」と「適用」を加えることによって、預言者エレミヤの時代の南王国ユダの状況と、一七世紀当時のピューリタン革命期のイングランドの状況とを重ねて、時代の解釈を行っている点が興味深い。オーウェン自身がこの説教の中で、「これらの事柄はわれわれへの前例 (example) として書かれている」と述べている¹⁵⁾。以下で考察するように、オーウェンにとつて説教とは、神と人間の関係という観点で時代を聖書によつて解釈する業であると捉えることができるのではないであろうか。つまりオーウェンの説教には、彼の歴史神学が表れていると考えられるのである。

オーウェンは、エレミヤ書一五章を五つの主題に分けて積義を行なっている。第一はユダとエルサレムに対してなされる荒廃と破滅という恐ろしい神の裁きの宣告について(三節—一〇節)、第二はこれらの圧倒的な災難とその原因について(四節、六節)、第三はこれらの裁きの必然性と、宣告されたすべての災いを実行するお方としての主の厳格さについて(一節)、第四は預言者の状態と状況について、および神の厳しい摂理の下での預言者の心構えと態度について(一〇節、一五節—一八節)、第五は預言者の訴えと、預言者に対して示された神の応答につ

いて（一一節―一四節、一九節―二二節）である。

第一の主題の「考察」では、「罪深い民に対して神の蓄積された怒りは、定められた終末の成就のために、様々な仕方では表される」と述べられている¹⁶。エルサレムの荒廃と破滅を、神の裁きの宣告として捉えているのである。

「蓄積された怒り」（ローマ二章五節）とは、「頑なな罪人らに対して積まれた怒り」であると説明され、人間に対する神の怒りを表わす最初のしるしは、「くまなく回る炎の剣」（創世記三章二四節）であつたが、「あらゆる道で炎の剣をもつて神は罪びとらに会われ、罪人らは断固とした裁きの下に置かれている」と考えられている。そしてこのエレミヤ書一五章に描かれたエルサレムに対する災難を神の人間に対する裁きとして捉えている見方を、一七世紀当時の状況にあてはめて、内戦が起こりイングランドに災難が降りかかっていることに対して、次のように述べている。やや長い引用であるが、聴衆に対して情熱をもつて語りかけているオーウエンの説教の特徴がよく表れている部分であるので、引用してみたい。

このことはわれわれの魂に教訓として留めるべきことではないだろうか。この数年間いかにさまざまな災難がわれわれを襲っていることであろう。われわれもこの災難の下でいかにバロのような心を持つていたことであろう。この災難から自由になりさえすれば、すべてよしとするのであるか。この目の前の困難から救い出されることに、いかにわれわれのすべての思いを費やしていることであろうか。この堀や穴を通り過ぎさせたならば、平坦な道を歩くことができるというのであろうか。神はわれわれの最も安全であると思われる道をも、畏や蛇で満たすことができるということを考慮に入れていない。われわれに平和を与えたまえ。豊かさを与えたまえ。静寂の中で以前のようになわれわれらしさを与えたまえ。あわれな被造物よ。これらすべての望みは、

誠実さの中にあり、邪悪で血なまぐさい陰謀の中にはないということを中心に留めよ。もし平和があり、豊かさがあり、先に述べた事柄があつても、神がおられなかつたならば、何があなたの役に立つというのであろうか。神はあなたの平和を乱し、あなたの富を腐敗させることができないうか？あなたがライオンや熊のいる草原から逃れても、あなた自身の家の壁に手を置いて蛇にかまれるということを経ることはできないか？泉が開いている間は、川の流れを止めようとすることは無駄なことである。あなたの望む方へと心を向け、あなたのできる状況へと自らを置くとしても、これらすべての裁きに対する神との平和と和解がなければ、天罰の日にあなたに平安をもたらすものはないのである。いかに様々な災いが神の手中にあるかお分かりであろう。状況を変化させても、それら避けることにはならないのである。それは病人がベッドの一方の側から別の側へと向きを変えるのと同様である。病人が向きを変えている間、動くことに骨を折っているためにしばし痛みを忘れていたとしても、再び横になつてみると自分の状況は前と変わりはないことに気がつくであろう。

このようにオーウェンは、イングランドが「この数年間見舞われている災難」に対して、ただ災難を逃れようとするだけではいけないと述べ、「神との平和と和解」がなければ、「天罰の日」に平安はもたらされないと会衆に訴えている。彼は当時の内戦を、「神の裁き」として捉えていることがここから明らかとなる。彼は、「われわれは様々な裁きの下にあり、自分自身の力によつてその裁きから救われることは不可能なのである。」と第一の主題についてまとめている。

次にオーウェンは第二の主題として、「この様々な裁きのもたらされた原因について」考察を加えている。エレ

ミヤ書一五章四節に記されているように、「ユダの王ヒゼキヤの子マナセが、エルサレムでした行いのゆえに」、南王国ユダに裁きもたらされ、ユダの民が捕囚されなければならなかったことを指摘している。そして「王の諸々の罪に報いるために、民に対してなされた神の義なる裁きの公平さ」を表している事柄として、以下のように三つの事柄を挙げている。第一の事柄は、「彼を王として立てた民は、当然王の過失に報いることが求められる」ということである。「權威ある者らを神の代理として立てた民は、彼らの權威ある振る舞いによって神に責任を負い、それゆえに權威者らの罪深い過失による悲しい結果を被った」と記されている。第二の事柄として、「マナセ王の残虐さを恐れ、あるいは彼ら自身の利益のために王の暴政に対して王にへつらったがゆえに、民の多くの者が罪の中で彼に従い、ヒゼキヤ王の礼拝様式を捨て去ってしまった」ことを挙げている。「王が惑わす者となる時、追従者には事欠かないものである。」こと、そして「王が不義なる事柄を命じ、民が喜んでそれに従うならば、その民が破滅されることは公正で義になつたことである。」と考えられている。そして第三の事柄として、「民は統治権を持つているにも関わらず、王の挑発的な態度を抑制しなかつた。」ことが挙げられている。⁽¹⁹⁾このように、ユダに与えられた裁きの原因は、「マナセ王の諸々の罪」の故であり、マナセ王を王として立て彼の悪行に追従した民の罪の故であると考えられていることが分かる。

そしてこれらの事柄は、オーウエンの時代の「先例」であることが指摘され、「これらの罪が取り返しのできない破滅を招いたことを知ることは、われわれにとつてとても重要なことである。」と述べている。⁽²⁰⁾ここでオーウエンが、マナセ王とその民の罪について述べながら、一七世紀イングランドにおけるチャールズ一世とイングランドの民の罪を重ね合わせていることは明らかであろう。オーウエンは、マナセ王の生涯の特徴を二つの主な項目にまとめてある。一つ目は、「彼は高き所を建て直し、イスラエル王アハブがしたように、バアルのために祭壇を築き、

アシラ像を造った。」(列王記下二二章三節)とあるように、「偽りの礼拝と迷信」であると述べている。そして二つ目は「マナセは罪なき者の血を多く流して、エルサレムのこの果てからかの果てにまで満たした。」(列王記下二一章一六節)とあるように、彼の「残虐な行為」であると述べている。マナセ王の「残虐な行為は、国事における彼の専制政治が原因であるのか、あるいは偽りの礼拝に付随した迫害であったのかは明らかではないが、最も明白なことは、迷信と迫害、身勝手な礼拝と専制政治は、不可分であるということだ」と述べている。そして第二の主題のまとめの「考察」として、「残虐な行為による不義をともなった偽りの礼拝が、国の支配者の心を奪い、神の御心に精通してきたはずの民の多くの同意を得る時、民と国は憐れみを得ることなく、救いようのない忌むべき破滅を招く。」とまとめられている。

明らかに、説教を聴いていた会衆にとっては、チャールズ一世の行った専制政治と礼拝様式の強制とピューリタンらへの迫害が思い起こされたことであろう。チャールズ一世はウィリアム・ロードをカンタベリー大主教に抜擢して礼拝形式の改革を強制的に行ない、その改革に反対するピューリタンに対して激しい迫害を行なった。その礼拝形式の改革とは、聖堂(nave)の中心に置かれることの多かつた聖餐用テーブルを教会の東側に移し、祭壇として使用させること、この祭壇を人が触れぬように柵で囲むこと、教会への参列者は従来自分の席で聖餐を受けてきたが席から祭壇のところまで行き膝まづいて聖餐にあずからねばならないこと、また礼拝中にイエスの名が唱えられた時には、参列者は頭を下げて礼をしなければならないことなどである。これらの礼拝形式の改革は、ピューリタンらの目から見ると、偶像礼拝的で迷信的なものであり、カソリックの側に傾斜した危険なものと感じられた。チャールズロード体制による統制は次第に強まっていき、一六四〇年に短期議会が解散された後は、これらの教会の改革を法典化して、新教会法(一六四〇年)として議会の批准を受けることなく公布された。そこには国王の

権利が神に由来するものであり、国王への抵抗を禁止する内容も含まれていた。²³ このようなチャールズ一世の専制政治とカトリック的な礼拝形式の強制は、議会とピューリタンらの反発を招き、内戦へと発展するのである。そしてこのチャールズ一世の行なってきたことを、オーウエンはまさに「迷信と迫害、身勝手な礼拝と専制政治」であると捉え、マナセ王と重ね合わせているのである。オーウエンは、このマナセ王の罪によってユダが裁かれたように、一七世紀イングランドではチャールズ一世の罪によって、イングランドが神によって裁かれていると考えていたことが明らかであろう。

さらに第三の主題として、「迫りくる破壊の避けがたいことと、それを実行する神の容赦なさ」を挙げている。「罪が大きくなり破滅の時に至る」ことが考察され、「イングランドは、いくつもの政治体制において、二回、三回と国を滅ぼすほどの罪を犯してきた」と考えられている。²⁴ そして第四の主題として、預言者の置かれた状況と預言者の態度について考察が加えられている。すなわち、「神の最も偉大なわざと栄光をあらわす媒介者は、しばしば信仰ある人々ののろいと復讐の主な標的となる」ということ、そして「あらゆる面でとがのない人であっても、しばしば主に従うということの人々に忌み嫌われ、人々ののろいに苦しむことがある」ということ、「神の摂理の暗く難しい配剤の中で、神に選ばれたしもべ達は、しばしば重荷のもとに弱気になる」ということが指摘されている。²⁵

そして最後にオーウエンは、一五章の第五の主題であり説教のテキストとして挙げられた箇所を、「この状態と状況において、将来のためになされた神の預言について」、テキストを引用しながら、以下に記す四つの事柄としてまとめている。一つ目は、「彼らはあなたのところに帰ってくる。しかしあなたが彼らのところに帰るのではない。」と記されているように「預言者に対する神の預言」である。二つ目は、「わたしはあなたをこの民の前に、堅

固な青銅の城壁にする。」とあるように、「この預言の遂行のための助けと支えについて」である。三つ目は、「彼らがあなたを攻めても、あなたに勝つことはできない。」と記されているように、神のご計画の「成就と結果に伴い現われる反対者について」である。四つ目は、「わたしがあなたと共にいて、あなたを救う」とあるように、「主のご臨在による慰めと成就について」である。この箇所では「適用」(use)がいくつも記されて、会衆に指針を与えている。つまり、エレミヤ書一五章でなされている預言を、説教が語られた当時のイングランドのあるべき方向として受け止めて、議員らにヴィジョンを与えていると言えるであろう。「神にそむく権力者に追従することは、神に反抗する裏切りの企てである。」ということ、「あらゆる原因や動機を伴った墮落に再び陥らないように、義の道を常に歩くように」、「主の名によつて選り分けられた召されたすべての者たちが、神とこの国の敵への罪深い盲従から、回復するように努めなさい。」と強く勧められている。そして「特に困難で逆境にある時にこそ、正しき業を常に行っている人々に対して力と負けることのない護りが神から確実に与えられるであろう。」「神は神の眞実と義の道を保つために、墮落した人々に対抗する神の栄光の道具である者らを護られる。」と説き、神の護りが約束されていることが繰り返し強調されていた。⁽²⁸⁾

まとめ

チャールズ一世の処刑翌日になされたこのオーウェンの説教は、預言者エレミヤの時代の南王国ユダと、一七世紀イングランドを比較して、当時のイングランドの時代状況を神学的に解釈している。この説教において、マナセ王とチャールズ一世、そしてユダの民とイングランドの民が重ねあわされて、聖書のテキストを釈義しつつ、一七

世紀の歴史を神との関係において読み解こうとしていたことが分かる。聖書の民の歴史が、イングランドの歴史の「前例」として捉えられているのである。オーウェンは、マナセ王を例に挙げて、マナセ王が偽りの礼拝や残酷な行いをしたことにより、そしてその王に民らが盲従したことによって、神は公平な裁きを行ったことを示しつつ、偶像礼拝や専制政治をする為政者は、神の裁きによって滅ぼされることを説いていた。すなわち、マナセ王とチャールズ一世を重ね合わせることによって、マナセ王が「迷信と迫害、偽りの礼拝と専制政治」という彼の罪のために滅ぼされたように、チャールズ一世の処刑が彼の行いに対する神の裁きであったことを示唆した説教であったと言えよう。将来イングランドが神によるこぼれる国となるためには、イングランドを治める者たちは、偽りの礼拝、迷信、専制政治を国から排除し、神の正しき道に立ち返るべきであると説いていた。このように国を治める為政者のあり方、国政の指導者たちのあり方に対して、指針を与えた説教であった。ピューリタン革命期のエポックとも言うべき国王処刑にあたって、オーウェンの歴史解釈が表れた説教であったと言えるであろう。

以上の説教分析を通して、ピューリタンの説教を分析することは、目の前に展開されているピューリタン革命を同時代のピューリタンがどのように聖書を用いて神学的に解釈しているかが明らかとなることが示された。ピューリタンの説教分析を通してピューリタンの歴史神学についての考察を試みることは、わが国の神学研究においては今まで余りなされてこなかったことであるが、ピューリタンの歴史神学を理解するためには必要な作業であると考えられる。

- (1) H. Davies, *The Worship of the English Puritans*, Westminster, 1948, p. 182.
- (2) William Haller, *The Rise of Puritanism*, New York, 1938 & *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution*, New York, 1955 参考。
- (3) John Wilson, *Pulpit in Parliament: Puritanism during the English Civil Wars 1640-1649*, Princeton, 1969.
- (4) パーキンスのこの書にはラームスの影響が見られると指摘されている。Wilson, *op. cit.*, pp. 139f.
- (5) Wilson, *op. cit.*, p. 88.
- (6) クロムウェルがオーウェンに最初に出会った時の出来事は、印象的エピソードとして残っている。一六四九年四月一日に下院で行なったオーウェンの説教をクロムウェルが聴き感銘を受けて、クロムウェルからアイルランドやスコットランドへの遠征の際に従軍牧師となつてはしむと誘つたといふ。
- (7) Wilson, *op. cit.*, pp. 139-140.
- (8) クロムウェルが総長(chancellor)を務め、オーウェンが副総長(vice-chancellor)となつた。オックスフォード大学は今日まで伝統的に総長は名誉職であり、実質的な務めは副総長が行なつてゐたといふ。
- (9) オーウェンの伝記として、H. Orme, *Memoirs of the life, writings and religious connexions of John Owen*, London, 1820 & A. Thomson's 'Life of Dr Owen' (*The Works*, vol. I. に所収) 最近の著として Peter Toon, *God's Statesman: The Life and Work of John Owen*, Exeter, 1971 がある。
- (10) W. H. Gould ed., *The Works of John Owen*, 24 vols., London, 1850-1855. 復刻版(W. H. Gould ed., *The Works of John Owen*, 16 vols., Edinburgh, 1967) 及び *Commentary on Hebrews* の七巻分、トレン語の著作が省略されてゐる。本稿では、復刻版が用いられてゐる。以下 *Works* と略す。
- (11) Peter Toon, 'A Message of Hope for the Rump Parliament', *The Evangelical Quarterly*, 43 (1971), p. 82.

(12) 説教の番号は筆者が便宜上付けたものである。

- (13) Toon, *op. cit.*, p. 85.
- (14) Wilson, *op. cit.*, p.95.
- (15) *Works*, VIII, p.137.
- (16) *Works*, VIII, p.134.
- (17) *Works*, VIII, p.135.
- (18) *Works*, VIII, p.135.
- (19) *Works*, VIII, p.136.
- (20) *Works*, VIII, p.137.
- (21) *Works*, VIII, p.137.
- (22) S. R. Gardiner, *History of England from the Accession of James I to the Outbreak of the Civil War 1603-1642*, XII, pp. 309-312, XIII, pp. 114-116.
- (23) Gardiner, *op. cit.*, IX, pp. 142-146.
- (24) *Works*, VIII, p. 138.
- (25) *Works*, VIII, pp. 139-140.
- (26) *Works*, VIII, p. 143.
- (27) *Works*, VIII, p. 146.
- (28) *Works*, VIII, pp. 149ff.